インドの旅雑感

渡　辺　　明*

1. コインバトールへの道

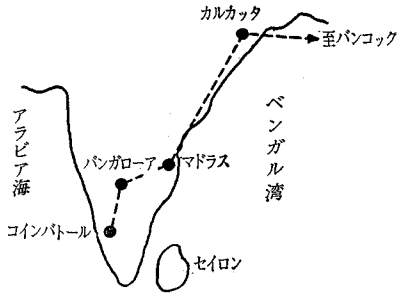
鉄筋コンクリートおよびプレストレストコンクリートのせん断，ねじり，ボンドに関する国際会議に出席するため羽田空港を発ったのは，まだ屠蘇気分もぬけやらぬ1月12日，12時20分であった。開催地は，インドのコインバトール。緯度10度の気候に合わせて，羽田で冬着から夏着へ改め，スーツケースの中味もすっかり向暑装備に変えた。ホンコン，バンコック経由，ダムダム空港に着いたのは，現地時間で宵の6時，時差を勘定に入れれば，日本時間で夜10時頃になる。

ムッとする暑さの中，通関手続きをすませて，バスでホテルグレートイースタンへ向う。沿道は人，人，人。襟なしのワイシャツをもっとゆったりしたようなクルタの裾を長くたらし，腰から下には白い布を巻き，その端を両脚の間に，まわしのようにくぐらせるドーティをつけた男達が，黒い裸足で歩いている。

カルカッタは，さすがインド第一の規模を誇る都市だけあって，中心街には古く大きな建物が並んではいるが，街角や店頭に，裸電球がわびしい光を投げているだけで，ネオンもきわめて少なく，昨夜の東京と比較すれば隔世の感である。黒塗りの自動車の群にまじって，人力車，19世紀的馬車がのんびり走っている風景は，日本人にとって絶えて久しい明治，大正の風景である。うす暗い歩道はまさに人の洪水，三々五々とたむろする人の影，あたりかまわず寝転がっている人間達，その間を縫う人々でごった返している。夜は彼らにとって夕涼みの好機であり，天国でもあるようだ。

翌朝，インド航空でダムダム空港を出発，ジェット2時間半でマドラス空港に着く。同空港でプロペラ機に乗りかえて14時15分出発。途中，バンガローアに着陸後再びコインバトールへ向けて飛び立つ。機内でアメリカのコリンズ博士が「ドクターワタナベですね」と話しかけてきた。会議に出席する日本人は筆者一人だったので，名簿で調べて知っていたらしい。彼のエネルギッシュな研究成果を聞く。お陰で退屈せぬまま16時25分目的地に到着した。昨日羽田を発って以来32時間の旅であった。

インドの旅・旅程図



コインバトールの空は，いやが上にも青く澄み，夏の太陽がギラギラと輝いていた。

2. 国際会議

コインバトールは人口50万人ぐらいの中都市であった。緑に包まれた静かな街で，目抜きの道路は，きれいに舗装してあった。そこを荷車をひいた牛，のろのろ歩きの牛などが行き交う様は，誠にのどかで楽しい。いずこの国でも同じだと思うが，駅，銀行，官庁などが，やたらに重々しくたたずまい，それらの間に，古びた店がならんでいる。古色蒼然たる黒塗りのタクシーに身をゆだねて，会議場，PSG (Peelamedu Somanaidu Gavindasamynaidu) 工業大学へ向う。沿道には要人の白い瀟洒な住まいがならび，鮮かな南国の花に囲まれて美しい。20分あまりで同大学キャンパスに着く。

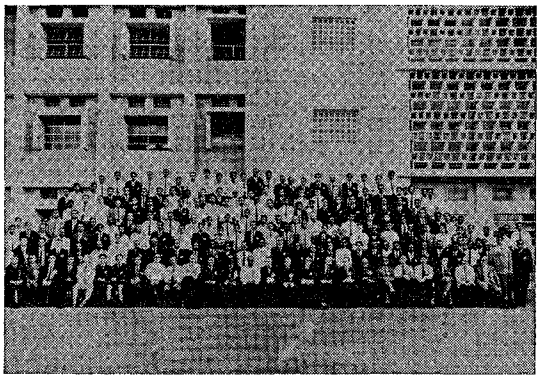
* 正会員　工博　九州工業大学教授　開発土木工学科

淡いグリーンとクリームのツートンカラーの建物群がならび，インド特有の真赤な土に映えていた。正門右側に，意欲満々のシンボルタワーがそびえ，このほかにも，立体トラス構造，シェル構造などによるダイナミックなシンボルが随所に配置され，見事なレイアウトで，教育と研究の場を盛り上げていた。

会議は 13 日から 17 日まで，5部門に分けて行なわれた。せん断 (29)，ねじり (16)，ボンド (16)，重複問題 (14)，関連応用問題 (13)，カッコ内は提出論文数である。

参加者は，外国から 33 名，インド国内から 191 名，計 224 名であり，アメリカ，イギリス，西ドイツをはじめ，カナダ，オーストリア，マレーシヤ，トルコ，イランなど世界の各国から 1～2 名の割で集まっていた。

記 念 撮 影



会議は，議長挨拶—総括報告—本人発表—討論の順で進行した。

ディスカッションは，質問者が壇上のマイクの前に立って問い，発表者がそれに答え，また，議長，総括報告者，その他誰でも自由に意見を述べ，補足助言してもよい方式であったが，その質問が何と友好的であったことか！ゼスチュアたっぷり，和気あいあいとして，むしろ発表者に，いろいろな角度から有益な助言を与えていた。予定の時間を1時間近くも超過することはざらであったが，だれ一人席を立つ者もなかった，あのなごやかな雰囲気を筆者は忘れることができない。

3. サリーの魅力

ダムダム空港に着いたのが夜中で，カルカッタの第一印象が“ムンムンする野暮ったい男の街”であっただけに，翌朝，色とりどりに颯爽と歩くサリー姿を見たときには目をみはった。色は概して赤，緑，オリーブなど大胆な原色が多く，それが，大きな目，彫深い顔，しかもプロポーションのよい，インド女性によくマッチしていた。世界の国々が，おおむね西洋化しつつある現今，彼女らが，民族衣装の誇り高らかに胸をはって歩く姿は，灼熱の太陽の下に映えていっそう美しかった。

コインバトールの一宵，トルコのエルスロイ教授，マレーシアのナバラナラジャ教授らと，バザールにサリーを買いに行く。サリーは幅1メートル，長さ5メートルくらいの一枚の布にすぎない。生地は，シルク，木綿，ナイロンなどがあり，縫い取りで小柄な模様をつけたものから縁取りだけのものまで，いろいろあった。

サリーの着方を教わる。はじめ，腰から下を巻きつけ，残り半分で上体をゆったりとおおうのだそうである。身体の線を大事にするインド人にとって格好の衣装であり十重二十重に巻立てる，日本の着物にくらべ，何と簡単で無造作なことであろう。胸の付近は，チョーリーと呼ぶごく短いブラウスに隠れているが，ウエストのあたりはサリーが斜めにかかっているだけなので，どうかした拍子には腹がみえたりする。インド航空の機内にてグラマーなスチュアーデスのおへソや横腹が，通路を過ぎるたびにちらついて眩しかったが，彼女らは，別に恥ずかしいとは思っていないらしい。そういえば，マトウラー仏像の衣は，肉体の現われを妨げぬようにつくられているし，ヤクシー像は，まさに官能的だし，そしてコナーラク遺跡にみられるミトウナ像も，その姿体や肉付きが実にリアルで肉感的である。すなわち，インドの神々は，性的現象を否定せず，むしろ，それを超えることを教えているように考えるとき，サリーの大胆さや率直さの裏には，あるいは，こんな思想が反映しているのかもしれないと思うのである。

4. 手で食べる

今宵はマドラス州工業教育庁長官招待，明日は PSG 工業大学学長招待といった具合に，会議期間中，夜はほとんどパーティが続いた。千人も入ろうかと思われる大会場は大きく三つに区分され，それぞれビジテリアン (vegetarian)，ノンビジテリアン，そしてウエスターンの料理が用意されてあった。外国人は好きなところへ，インド人は宗教の掟にしたがって（ヒンズー教徒は牛肉を，イスラム教徒は豚肉を食べない）着席するわけである。昼間，ボンド問題で討論し，親しくなったガングリ氏が「せっかくのご来印，今宵はぜひインド食を」としきりにすすめるので，ビジテリアンの席に着く。

周知の通り，片手づかみの食事である。箸を使って食べる日本人にとって，手づかみの食事には“きたない”という気持の方が先立って抵抗を感じる。暑い国柄，刺激性の強い，濃味のタレをつけ，いろいろなものを混ぜ合わせて食べているようだが，特に，手づかみの指の間

からタレがにじみ出るさまは，感覚的にいただけない。

彼らは，食べるときには決して左手を使わない。彼らにとって左手は不浄の手であり，右手は神聖なのである。すなわち，左手はたとえ石けんで洗ってもきたないのであり，右手は，たとえ汚れていてもきたなくないわけである。左手で子供の頭を撫でたり，左手で握手などしたら大変なのである。器用さを自負する日本人でも，片手だけで食べろといわれれば，さぞ粗相をすることであろうに，インド人が食べるときの片手さばきのあざやかさには驚ろき入る。

日本人は，概して，飯は飯，汁は汁とそれぞれの味をたしなむ傾向が強い。西洋料理でも，次々とナイフ，フォークが変わることによって，個々の味覚を楽しむのであるが，インド人は，終始一貫五本の指だけでまかなわねばならぬから，大方は，口に入れる前にプレミックスしてしまう。どうみても，淡白なる個々の味覚追求型ではない。ダールマール氏曰く，「われわれは一度に二度食べる。すなわち，まず，手の感触で食べ，ついで，味覚で食べるのだ。こんなすばらしい食べ方を知らない日本人や西洋人はかわいそうだ」と。ハッとする思いであった。なるほどそういわれてみれば，そうかもしれない。

さて，しかしながら，帰国後の5月 17 日，東京朝日講堂で，外国人による日本語弁論大会が催されたので出かけたが，「流行について」と題してしゃべったネパールのカルマチャリヤ君が「中華料理はおなかを一ぱいにするための料理だ。日本料理はちがう。日本人はまず器を見て目で食べ，それから味覚で食べている。すばらしい料理だ。日本人の平均寿命が長いのは，このおいしい料理のせいだ。ニクソン大統領よ，コスイギン首相よ，このすばらしい日本料理のテーブルについて，世界平和問題を語ったらいかが…」という意味のことを述べていた。滞日わずか4年の同君が，こんな深い“日本のこころ”がわかったとはうれしき限りだが，心憎いおもいでもある。そうだ，日本料理にはこんなすばらしい面もあることを，カルマチャリヤ君よ，帰りなば，伝えてよ！

5. 悠々たるインド人

実験室で卒研に励んでいた学生に「就職は決ったのか」と尋ねたところ，「とんでもありません，そんなものは卒業してから探します。あるかどうかもわかりません」という返事がかえってきた。卒業を目前に，就職未決定だとしたら，日本の学生ならば，さしずめいらだって卒論などゆっくりはやれまい。

インドの飛行機は，末端にいくとよく遅れる。帰りのコインバトール空港では1時間以上も遅れたが，その旨のアナウンスがあっても，インド人は眉一つ動かさない。ゲートに立ったまま，あるいは通路に立ったまま，何の苦情もなさそうに平気で待っている。日本人なら，舌打ちの一つもしてロビーに引込むか，あるいは近くのパチンコ屋にでも駆込むところであろう。

かくのごとく，土地柄か，インド人は実に悠々としている。彼らは決して動じないし，急がないのだ。日本では，いまや，“分刻みのカレンダー”が出回るほど忙しくなっているし，そして，誰かがいった「赤の飛出し早すぎる。さりとて青では遅すぎる」という，わけのわからぬ道路横断訓の意味が，わからねばならぬほど，追いたてられているのである。通勤ラッシュ時の日本人の眼は，いまや，血走って殺気立ってさえいる。

インド人が悠々としているのは，必ずしも人間が大きいためばかりではないかもしれない。無気力，無抵抗に根ざしている場合も考えられる。すなわち，何もかも神の思召しと解釈し，彼らの中には，人間差別のカースト制にすら疑問を抱かず，神の与えた宿命と信じ込んでいる者も多いときく。しかし，陽気に明るく，あしたのことを考えず，悠々とその日を生きている彼らの態度に明日をおもい，明後日を煩いすぎるせっかちな日本人は，少なくとも学ぶべきであろう。

“Tomorrow is another day” とつぶやいたのは，スカーレットオハラで，これを「明日は明日の風が吹く」と名訳したのは，大久保康雄氏だが，インド人はまさにゆったりと明日に向かっている。

6. 日本を見なおす

「日本は魅力的な国である」と筆者が接した，あるインド人がいった。インドの一割くらいの面積しかない国。しかも，第2次世界大戦で完膚なきまでにたたかれた国が，今日，国民総生産で世界第3位にのし上がり，映画で観る東京にはすばらしいビルが建ちならび，おびただしい車が走っている，というのである。

MIT に2年，ロンドン大学に1年留学したというアーマダバードのダスツール氏は，また，次のようにもいった。「日本人留学生は，外国へ行っても2年もすれば必ず帰りたがる。他の国の者，特に後進国の者は帰りたがらないのが普通だ。日本は，よほど住みよい，すばらしい国らしい。繁栄の秘密を知りたいものだ。一度ぜひ行きたい」

日本の戦後の発展ぶりは，当の日本人自身すら予想もしなかったことなのだから，彼らが不思議に思い，魅力的と思うのも無理はない。このことに関して，最近，ニューヨークタイムズ紙のサルズバーガー記者は“敗北の効用”と題して，次のように論評している。すなわち「日本は，いまや世界の商船の半分以上を建造し，アメ

リカを除けば，どの国よりも多くの自動車を生産している。日本のこの奇跡的繁栄は，日本人の天才的能力とエネルギーを別にすれば，二つの異常なできごとによって促進されたものだ。第一は，敗戦の結果，植民政策にそそがれる国力の浪費が消え，近代的工業力の再建をもたらした。第二は，マッカーサー将軍が，日本に，いっさい，軍事力の維持を禁ずる憲法を課したことだ。“大日本”は，安全保障の負担をアメリカにゆだね，日本自身は，わずかに国民総生産の 1% 以下をそれに費やしているにすぎない。これは，まさに“最少限の費用で最大の安全を確保する方式”だ」と，皮肉と羨望を交えて述べているのである。国防費が予算の 42% にも達しているアメリカ人の偽らぬ気持であろう。まさしく，戦後の日本を繁栄に導いた最大の功労者は，平和憲法にちがいない。日本人は，軍艦や戦闘機の代りに橋を架け，ビルを建て，そしておびただしい自動車をつくったのである。

考えてみると，国防ほど金のかかるものはない。しかしながら，人間が国家を意識し，民族を意識するかぎり国境の争いは絶えまいし，特に陸続きの“熱い国境線”をもつ国々の悩みは果てしない。まして，内に山積する難問をかかえながらも，印パ，印中紛争を背景にして多額の国防費を支出せねばならぬインドの悩みは格別であろう。これにくらべると，海に囲まれる日本は幸せといえる。もし日本も陸続きだったら，徳川三百年の泰平の夢なぞむさぼれなかったろうし，植民化された多くの国々と同様な運命をたどったかもしれないのだ。こう考えると，海は数千億円の国防費にも匹敵しそうである。

さて，インド人の無気力さの一因として，よく“暑さ”があげられる。勤勉さを自負する日本人でも，40 度を越す暑さには働く気もそがれるというものだろう。とすれば，暑さに頭がぼける頃には涼風が訪れ，そして雪となり，やがて花の春がめぐりくる，移り変わる日本の四季は，何物にも代えがたい天の恵みではないだろうか。

それにしても，世界文明発祥の地，インド……。あのすばらしい寺院をつくった歴史の国インドが，今日低迷する原因はまだまだあるはずだ。筆者は，離印の機中，あれこれと考えてみた。複雑なる言語，根深い宗教の問題，カースト制，人口過剰，食糧難などに悩むインド。通り一遍の政策で片付く問題ではない。「そうだ，あまりに大きすぎるのだ」こんな見方をしはじめた頃には KLM 861 は，すでにバンコックの上空にさしかかっていた。企業に最適規模があるように，国にもそれがあるのではないだろうか。それをはるかに超えた版図を治めることは，いかに偉大なるマハトマ・ガンジーでも至難の業であったにちがいない。地理的環境，気候，そして規模と三拍子揃った日本は，まさに恵みの国といえそうだ。

ある日，コインバトールで「カワバタヤスナリの雪国を読みました」とガングリ氏がいった。「日本のハイクはすばらしいですね」ともいった。まさか，南インドの片隅でこんな言葉を耳にしようとは思ってもいなかったし，インドの土木屋にもこんな文化人がいたのかと，たいそう嬉しかったことを思い出す。地理的にも，歴史的にも恵まれてきた日本，勤勉なる先祖が営々と築いてきた日本，そして，それは川端康成氏の辞を借りれば「美しき日本，春は花夏ほととぎす秋は月，冬雪さえて冷しかりけり」でもある。

他国の核のカサの下，一種の経済的鎖国状態の中で高度成長を遂げた日本のこれから先は険しい。われわれはこの恵まれた日本に甲んじてはならない。この国を愛し，いつくしみ，さらに，よりよい魅力的な国にしたいものである。そして，同時に，こんな筆者を心から迎えてくれたインドの，たゆまぬ脱皮と発展を祈るものである。

最後に，この会議参加に際し，土木学会西部支部（支部長・村上正九大教授）および九州工大 50 周年基金からご援助頂きましたことを付記して，深謝申上げます。

（1969.7.5・受付）

改訂小委員会編 **海岸保全施設設計便覧** 改訂版

A 5　294 ページ・上製・図表；写真多数

定　価　2300 円　会員特価 2000 円（〒 100 円）

第1章　海岸における水理現象／第2章　海岸調査／第3章　設計法　に分け，全 24 節の大便覧。そのほか付表・索引・資料広告をおさむ。